

## クワンティエンの夢

多谷昇太

(三) 阿漕の浦奇談

しかし今その出家をいさめるような稚児のかわいい声の花散らす風をつくようにして義清の耳につたわってくる。簡素ではあるが寝殿造りの風情をどめた庭に目をやれば可愛いさかりの我娘花子が手毬をついて無心に遊んでいる。かたわらには我妻春子が。二人を見やりながら義清はあらためて出家の覚悟をおのれに問うてみる。弟がいて後事をすべて託せなかつたらさすがの自分も出家などしはすまい。

領地田仲庄を手放すどころか佐藤家の血筋さえ自分で絶やすことになってしまふからだ。眼前の妻子への扶持を始め万事弟に託し得たからこそその出家であつたが、しかしその妻子の行く末などを思えばすべてがこれ断腸である。ではいったいなにゆえの出家なのか。

届かぬ月とも思っていた中宮璋子との阿漕の逢瀬の次第、鳥羽上皇の覚えめでたきこと等、仕官以来すべてが思いも寄らぬトントン拍子の内に起きた母みゆきの急死。さらには同じ北面の武士で兄弟の契

りさえ交わしていた親友の死が相次いだのだった。

うかれ人生(?)を誅されたような二人の死に、もともとあつた義清の厭世感と求道心が現実のものとして我が身によみがえつたのである。またうかれていた間はつとめて見ぬようにしていたが、宮中における殿上人はじめ公家貴族たちの保身争いや、他方性の乱脈にも心をふさぐものがあつた。男色もこのころは上皇を筆頭に公然としたものであつたのだ。

義清はこれにつくづく嫌気がさしていた。絹二千匹を献上さえてはたした左兵衛尉への仕官だつたが、この宮仕えという世界にはや辟易としていたのである。しかしそれならば義清おまえこそ、余人が思うことさえ禁じていた阿漕の浦を、現実に仕出かしてしまつたのではないかと人から云われそうである。確かにそうなのだがしかし義清にはうまくは云えなかつたがこれをして一大謀反、おのが性欲からの大失態だつたとはどうしても思えなかつた。「知らざりき雲居のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは」とみずから詠んだごとく、璋子は自分にとつては中空にかかる月で、とどかぬもの、いわば天女、あまつおとめだつたのである。その天女とうつつにまじわるとはどういうことか、男として、いやあえ

て云えば求道者として義清は稀有の体験をしてみたかったのだ。天女と人間の睦み、あこがれ（理想）と現実の合体とはどういうものか、それを確かめたかった。まして宮中における璋子への非難に義憤を感じていた身であれば、禁断の浦であったとしても密漁するに躊躇はなかった。ほかならぬその伊勢の奥院からいつときの鑑札を与えられた身であれば、である。しかしその折りはからずもそのあまつおとめから、我が身義清への同様の思いを聞かされるとは、これは意外中の意外だった。文部両道の、若き北面の武士へのつまみ食いの思いもあつたらうが、厭世と求道に非凡なものを常々義清に見て居、これとの肉体による合一を、いわば師弟の契りを得たかつた璋子はその折り云つたのだつた。蓋しこれはまさに義清の思いともども、はたやはた、である。

はたやはた、肉体による法との提携はなされ性愛と求道、引いては地上と天上の疎通はなされるものだろうか。肉体五官（五欲）と精神の高貴さという永遠に対立すると思われるものが安易に融合するとは思われない。煩惱からの解脱をときながら夫婦に限り性欲の発露はよしとする、わかつたようではない、宗教の教えにも我々凡夫は頭を悩ませ続け

ている。しかしそれらへの答えをここで性急に求めることはよそう。また謎かけにはなろうが、クワンティエンというここではいまだ謎の言葉にその追及と答えを求めたいとも思うのである。

とにかく、いつときはわが袂に宿した愛しい璋子へ、得子立后というかたちで宮中からの疎外がせまっていた。単に疎外のみならず得子に皇子が誕生したことから世継ぎ争いの政変にまで発展しそうな雲行きとなつて来た。すなわち璋子と鳥羽の第一子である崇徳と、得子一派の争いである。本来なら正統な世継ぎとすべき崇徳を鳥羽は、叔父子、として嫌い、認めなかつた。璋子が自分のもとに入内したときにすでに懐妊していたと思われる崇徳を、祖父白河の種として決してわが子とは認めなかつたのである。祖父の子であるなら自分よりあとに生まれても叔父になる。だから叔父子である。すべては白河の性の乱脈と（一説では御所内のすべての女に彼を手をつけたと云う。平清盛も彼の隠し子と云われているし、鳥羽・璋子の第六子雅仁親王（後の後白河帝）も彼の種と云われている。つまり鳥羽に入内させたあとも彼は璋子と関係を持ち続けたわけだ）上々皇とでも云うべき仕儀のなせるわざであり、わ

ずか五才だった崇徳への強引な讓位を鳥羽（この時二十才）に迫り、実権のない形ばかりの上皇として彼を七年（天皇在位を含めれば二十二年）ほど置いていたのである。俗に云う藤原摂関政治に代わる白河の、幼主三代の政、という次第だったが、そのにつくき白河の崩御ののち鳥羽はすぐに崇徳帝（この時十二才）から政所を引いた。これで晴れて実権のともなつた院政を彼は敷けたわけである。しかしそれにとどまらず十一年後寵愛する得子に皇子が生まれるや、その体仁親王をわずか三才で近衛帝として即位させ、二十三才になつていた崇徳帝を讓位させた。つまり白河の、幼少の政、を彼も引き継ぎ上々皇となつた次第。因果はめぐるといふか、なんだかもう訳のわからぬ複雑怪奇な御所の仕儀ではあるが、要はこの時璋子の榮華は去つたのである。璋子は髪を切り法金剛院に落飾させられた。得子呪詛の嫌疑をかけられたとも云うがいづれにせよ得子一派の璋子追い落としへの画策がここに成就したわけである。上皇の妃でありながら皇后ともなつていた得子とその一派（元の摂関家）はこれで名実ともに待賢門派・閑院流勢力を凌ぐことになつた。

さてではここに於いて幼少以来四十年弱の璋子の

内実はいつたいどうであつたのか、阿漕の浦逢瀬に至る心の経路をさぐりたい。傍目には乱脈と云うほかはない白河と鳥羽の性欲と業を彼女は終生身と心で受け切つたわけだが、これをして主体性のない女身のかなしさと、人形の家のノラであると、余人は論評にかまびすしかろうが、しかし飽くまでもそれは全員ではない。たとえば子を身ごもり、産むことのできない我々男であれば女性、就中母としての何かのことはこれはわからないのである。少なくとも私はそうだ。権力者であろうが何であらうがすべては自分女がつくりだした子だどこかで思うなら、主体性の如何ははたしてどちらにあるのかさえわからなくなつてしまう。男にみずからを愛させ子を結実させる、自覚せずともそこに喜びと主体性を見ていたのなら人形の家のノラとは云いがたい。まして実家の閑院流一族からは「懐妊？でかした！」ともろ手をあげて喜ばれるなら況やのことである。しかも同腹で七人の皇子皇女の生母ともなると、これはおそらく記録ではあるまいか。畢竟そのぶんだけ璋子の自信と傲りは強まったにちがいない。歴代王朝の後としては、比類のないほど？、と勘ぐりたくもなる。世界は自分を中心にまわる、とまでは云わな

いがとにかく傲り、輝いていただろう。ところがこれが得子出来とともに一気に、かつ劇的に崩れ去るのだ。いやでも璋子は自分の生き方を客観的にかえりみることになり、なおかつ皇子皇女たちの未来に不安をいだくことともなる。はなはだ語弊があるが、生んだ皇子たちの数の分だけ、散らかしてしまった、という心根にさえなるかも知れない。自分ひとりだけの失脚ならともかく、得子に皇子誕生で崇徳はじめ自分の皇子皇女らすべてに、不安の星をいだかせてしまったという、背負いきれないほどの負担を感じはしなかつたろうか。そんな折り「そよ、あの者、義清：」と思いつたのかも知れない。徳大寺実家に帰った折りの歌サロンなどでなら非公式に義清と面つきあわせて「人の世」を語ることもあったのに違いない。

おそらく未だ青年らしい哲学的にすぎるきらいはあつたろうがその博識と感性、そして出家への気概にはいたく感化されただろう。とつぴだが約八百年後のかの麗歌人、柳原白蓮（伯爵令嬢にして大富豪夫人）と青年宮崎竜介の邂逅とひよつとしてそれは同じだったかも知れない。彼竜介同様に義清の地位ある女性（によしよう）への思い入れは隠すべくも

なかつたし、それならひとつと今はなけなしの自尊心を璋子はくすぐられもし、なにより「吾を救いなむや（助けて欲しい）」の思い入れとともに我身との逢瀬を与えたのであろう。

さてそこである。再び義清の立場にもどるが、天女・璋子との交わりはかない、のみならず未だ出家願望の身とその折り云つたにもかかわらず、いきなり引導まで乞われては身にこそばゆいどころの騒ぎではなかつたろう。それこそ三保の羽衣伝説の伯梁ではないが、天女の生殺与奪の権利まで得た気がしたかも知れない。しかしこの場合生かすとは引導を渡すがごとく璋子の懊悩を晴らし得ることを云い、殺すとは「身に過ぎたるこそ」と、畢竟おのが無能を開陳するしかないことを云う。弘徽殿に於ける最後の別れ同様無念にも後者だつたろうが、しかし強い慙愧の念はその折り義清に残つたろう。一方璋子にしても強いうつ屈の果てにしてしまった逢瀬だったのであり、直後義清の将来を慮つては「阿漕の浦ぞ」と突き放す云い方をしたのかも知れない。してみれば義清の内には解決のつかない不安定さのみが残り、それは云つてみれば璋子のうつ屈がそのまま義清に伝播したとも云えるだろう。つまり璋子の懊

悩が文字通り肌身感覚でわかり、若くて純粹だった義清にしてみれば強く璋子に感情移入してしまったわけだ。もはや月が月でなくなり、青年哲学にすぎなかった厭世と求道が、無力なおのれへの自己嫌悪とともににわかには現実味を帯びて来た。自己保身争いの宮廷への嫌悪とも合わせ、またさすがに中宮との密通へのお沙汰が思いやられもし、前記近親の二人の死もかさなつて「出家GO」とあいなつたのだらう。ただし、である。では義清が死出の旅のごとく悲痛きわまりない思いでそれを為したのかというと、それは疑問符を呈さざるを得ない。中世自由人につながる、能因法師以来の、出家というよりはそれに名を借りた遊行詩人願望が彼の中にもともとあつて、ひよつとしたらそれが一番強かつたかも知れないのだ。それをなし得る受領階級の身だったからこそだが、しかし仏教の厭世と悟りにかこつけてそれを画策するとは、これは義清の傲慢と云うか、不遜のそしりを些かでも免れ得まい。後世小林秀雄が「(西行が)世を捨てた人物とはとても思われぬ。むしろ出家を新たな挑戦、冒険とでも捉えているよ。うだ」と論評しているが、まさに宗教人、遊行歌人として新たな人生に挑む青年佐藤義清の意気込みが

そこにはあつたと思う。

璋子の「数奇者め」は奇しくもそれを見取つての言と思われるがそのことと、今眼前に見る春子と花子、すなわちわが妻と娘の存在はさすがの義清をも花散らす一陣の風となつて攻め苛むのだった。いったいどう義清は妻春子に言いわけをしたものだらうか。二人への扶持を確約したとは云え若妻にとつてはむごすぎる義清の勝手ではあつた。この当時貴族階級において突然夫が妻に、裏の衣を見せる、つまり出家すると云い出すことがあつたとも当時の和歌には綴られてゐる。源氏物語の八宮のごとき男たちがいたということだらう。すれば妻春子にとつても受くべき悲運だつたと云えなくもないが、それにしても古語で云う「いかが」と云うほかはない義清の仕儀ではあつた。天竺のお釈迦様に於いても一見まったく同じような家族への無情のいたりだつたのだ。が、しかしそのおかげで実に無数の、我々衆生が救われている。はたして彼義清、しこうして西行法師におかれては、いかなる衆生濟度への心意気だつたのだらうか。私ごとき凡夫において、これ以上おもんばかることは差し控えたい……。

「ととさま」文袋をのぞく義清のもとに幼い花子が

駆け寄ってきた。無邪気に袋に手をかけて引つ張るとはからずも袋が落ちて中宮のおぐしが地に落ちた。思わず娘を突き飛ばしおぐしをもとに戻す義清、花子が大声をあげて泣き出した。春子が義清をにらみつける。北面の武士一の手練れ(?)佐藤義清も、法師西行もあるものか。おそろしい、ただ妻の目がおそろしい。人倫にそむく行為を自分は為そうとしているのではないか、いや、この道こそ……と唇を真一文字にむすぶがしかし、今は謎の言葉、クワンテイエンの苛みが彼の心を襲いつづけもする。大きくためいきをひとつついて娘を抱きしめ、あやまりつづける義清だった…。

### (三) 六道の蛇

、六道の桎梏とはいかならむ。そはおのが身そのもののごとし。さればいかが、誰か身より離るる。さるほどに蛇ぞ憑く…。

陰曆十一月、新嘗の五穀を具した舞台をいとやんごとなき人々が固唾を飲んで見守っている。はや舞樂の音は雅楽寮のもの師たちによって奏でられ、あとは舞姫たちの登場を待つばかりだ。しかしかなる指図の不手際かいつまで待っても五人の舞姫は

あらわれない。一座の目は自然上座の中宮へとそそがれた。舞姫の手配は中宮の裁量だったからである。何事かとばかり中宮はお付きの女房たちに目を走らせるが皆あらぬ方へと目をそむけてしまう。上臈の女房堀河でさえそうだった。考えられぬ珍事の出来に、何を処すべくもなく、ただうろたえるばかりの三界一の美后、中宮璋子。過去いずれの新嘗祭に於いてかかる失態があっただろうか。しかしとは云え、起きてしまったこの不始末は本来自分にはなく、実際には舞姫献上者たちや女房どもにその責を負わすべきを、今はなぜか我が身ひとつの咎としか思えない璋子だった。いつかどこかで同じような咎を犯し、尋常ならざる焦りと恐怖を覚えたことがあるのだが、それが何だったかはなかなか思い出せない。一座のなかに一人ぼつねんと放り置かれたような、まるで悪夢のただなかにいるような塩梅ではあった。心の中で自分を糾弾する声がある。「不貞の君」「さかり女(め)」「色々しきは、はて…」などとその声が高まり来、やがて堪えがたいほどに笑い声がひびきわたった。思わず耳をふさぎ絶叫しそうになった時、はたしてそれを救うかのように居並ぶ公卿・上達部らから声がかかる。「五節の舞姫出

でずんば、はた誰やかないたる」「あてきわむ方こそ。宮様となり」と、あろうことかこの中宮に、この璋子自身に舞台にあがつて舞えと云うのだった。

不敬のきわみというか、よもやの展開に、ついにまなじりを決すかと思われた璋子だったが、しかしそんな様子はまったく見られない。どころか、直前までの懊惱もどこへやら口もとに笑みさえ浮かべて今にも立ちそうな気配を見せている。それを察してか「いざ、舞はさせたまえ」「いざ、いざ」と一同で声を合わせるにいたる。やおら璋子は立ちあがり御座より降り来たって、檜扇を構えながら舞台へとあがつて行つた。最前止まりそうだったものの師たちの演奏も稀有の舞い手を得てその勢いを取りもどす。「少女子（おとめご）が少女（おとめ）さびすも。唐玉を手元（たもと）にまきて、少女さびすも」大歌を歌う拍子（男の主唱者）の声もあわせおこり、その歌詞の内容に染まったかのごとく璋子は若々しげに五節の舞を舞っていく。過去何度も舞を見知つたせいとかそれとも人には見せぬ隠れた才能でもあつたものか、プロの白拍子にさえ負けぬ見事な手さばき足さばき、その踊りぶりであった。つまずきなどするものかは、緋の長袴をまわし蹴るがごとくサツ

とさばいて見せるなど、その粹で優雅なことこの上ない。はからずも讚嘆の声があちらこちらからまき起こつた。「美（は）しきかな、美しきかな」「天人とてえやは舞う」とその美を讚え、「あな尊（とうと）」「のちなきこととなむ」などと前代未聞の中宮の舞をほめそやす。

璋子の胸に昇り竜のごとくだつたかつての栄華がよみがえる。花のさかりの絢爛にめくるめく、まさに「少女子（おとめご）がおとめさびする」ような日々に終始していた、その悦楽がよみがえり来つたのである。ここにいるすべての者たちの視線を感じる。誰か満開の花をめでざるや、望月を仰がざるや、その目に応じてこそ我はありなむを：とする賛美のまとであればこそその充実、人へのやさしさや、おもいやりが、またその自分をいささかでも与えたときの人の喜びなどが思い出された。はたして我はあまつおとめか：しかしそのとき一陣の、散らす風が心に吹いた。目が得子の姿を追い求めている。夫鳥羽の傍らに忌々しくも皇后として座している、その得子のくやしそうな様子が目に入ったとき、あまつおとめは地に落ちた。自分のみを目で追う夫の姿におのが栄華の再来を確信した璋子の顔に快心の笑

みが浮かぶ。あまつおとめならぬ、その六道の天界の心に応じるように、この時身を包む十二単が生きもののように璋子の身でざわついた。ついで不可思議な感覚が身に襲い来る。中空の、丑寅の方向に目が引き寄せられると思いきや、何と一座の公達らが皆その中空へと上って行き、そこから自分においておいでをしているように感じられた。地に墜ちたあまつおとめどころか、逆に十二単が羽衣のようになって我が身をも上へと昇らせてく。下を見ればそこには得子ひとりだけが取り残されていた。その得子をさして一座とともにさんさんに嘲笑するのだが、はて、ここ十余年来の我恨み辛みを一気に晴らすようなこの椿事快事の出来を、空中浮遊ともども一向に不思議と思はぬ自分が璋子にはどこかで解せないでいた。自分であつてないような、恰も何者かに誘導され、乗っ取られるような気さえもする。一瞬危惧の念を覺えたときさらなる快事がこれを掻き消した。なんと夫、鳥羽が、上空から自分に手を差し伸べている。得子ではなく自分に、この璋子に……満面に笑みを浮かべては檜扇を下に放り投げ、こちらも両手をさしのべつつ璋子が急ぎ夫のもとに寄って行く。天女の羽衣のように開いた檜扇がひらひら

と舞って落ちて行くのを受け止めた者がいる。ひとしきり鳴った童笛がこのとき止んだ。

「六道の蛇やある。六道の蛇やある」と大音声に連呼しつつ、恐ろしげな陵王（りようおう）の仮面をつけた男が舞台へと上がってきた。左手で受けた檜扇をゆっくりとふりながら、右手に抜き身の大剣をふりかざしつつ璋子のまわりをゆうゆうと廻り始めた。いつの間にか丑寅の中空から降りて舞台の上に立っている自分を璋子が確認する。公達らも元の席にもどっていた。いきなりの狼藉ものの乱入に「あれは誰ぞ」と悲鳴に近い声で璋子が糾弾したが誰ひとり取り押さえようとすものがない。勇猛なる北面の武士たちでさえ恐ろしげに陵王を注視しているばかり、刀の柄に手をかけるものもいなかった。

陵王ひとりに皆がいきすくめられているようだ。璋子の十二単が生きもののようにざわつき、その着付けがひとりだけでゆるんだと見えたとき、掛け声もろとも陵王が璋子に打ちかかった。「ものに狂うか！ 璋子が絶叫し床に倒れ込む。どす黒い血がみるみる流れ出したが璋子のものではない。十二単がひとりでに脱げていき床に落ちてひとかたまりとなり更に変形した。すなわち大蛇のあたまとなってそこよ



り出で来、全身をあらわしながら苦しげに床を這って行く、太刀を受けたところから大量の血が流れ出ていた。更にひもや打ち衣に変じていた中小の蛇たちも大蛇を追って逃れて行った。ついに単衣だけの姿となった璋子がまるでみずからが切られたように苦しんでいる。「璋子様、お氣を確かに！」大剣を置いて身を寄せながら陵王が喝を入れ、璋子の手を握った。その手から生気がつたわりくるように徐々に身が楽になって行く。「あたりを御覽ぜよ」陵王の面を取りながら男が璋子の視線をいざなつた。坊主頭のその男にどこか見覚えがあるが誰であつたかなかなか思い出せない。廻りを見ればいつの間にか内裏は消失していずことも知れぬ暗所になつてゐる。その暗闇のなかで六つの炎が二人を取り囲むように揺れていた。その炎のなかから人のうめき声が聞こえて来る。「あなや、おぞしきに」男の身にすがりながらおびえる璋子に「焼かるべきものなり。六道の業火なればなり」と男がさとす。年のころ六、七十、誰かに似ていた。必死になつて思い出だそうとする璋子の目の前で魔法のようにその男の衣装が変わって行く。すなわち派手な陵王のそれから簡素な法師姿のそれへと。ひとなつこい笑顔を浮

かべながら「璋子様、私です。義清です」と明かして見せる。「義清?…こはいかに、いかにかく古りたるぞ」浦島のごときいきなりの老変が解せない璋子に「これははしたり。いかにもわれ未來世よりまかり来せばかく古るびてなむ。御歌を拝し奉り今は西行となむ申しはべるなり。璋子様、みまかりて入る国に時のあるべしや、身の貴賤、男女の別さえせんなきこと、ただ魂のみ栄えがあるばかりにて、阿漕の浦さえとこしえにはべるなり」とやさしく、かつ淡々と語る義清、いや西行法師だつた。その一言一言が光となつて、何の無理もなく胸のうちに入るのが不思議だつた。耳というよりは心で聞いている璋子、ただ一言をのぞいては。「みまかるとはなんぞ。さは我が死すとや?」、みまかる、つまり、あの世へ行く、などと聞けば誰でも催す不安を璋子も口にした。今という大事をいっさい弁えぬ璋子に「さればよ、彼処を御覽ぜよ」と云つて丑寅の方向を西行が指さした。その方向はるか彼方の虚空に一点の光があらわれ、璋子の凝視とともにそれが一瞬のうちに数間先の光景となつて眼前に展開された。卑しからぬ臥所に真つ青な、すっかり顔色が失せた尼御前が伏している。「あれは…あれなるは」おびえる璋

子に「三条高倉第となむおぼえはべる。あれなる門院は……」「われか！」とついに臨終をさとする璋子だった。臥所の脇では夫鳥羽上皇が馨(けい)。読経のさいに打ち鳴らす仏具(ぶつぐ)を鳴らしながら身も世もない様で大声で泣いている。僧正に合わせる読経も途切れがちだ。たちまちみずからももらい泣きしながら「いかに(なんとまあ)わらべのごとき様や……わが背、わが背！」と得子出来以来の恨みもなにも消え失せて子をいたわるがごとく鳥羽を許す璋子であった。さらに西行が璋子の視線を誘う。「几帳の外にも尼御前のはべるなり」見れば堀河が身をうつぶして泣いている。「堀河！あわれ……やな」自分にかえきつてくれた堀河、その老後の行く末を思えばこらえきれず涙の堰を切る璋子。いまはすっかり人の本懐に返り、六道の蛇の影などあとかたもない。

ここぞとばかり西行が「上皇、堀河女御のこと、いずれも必ず拙僧が引導つかまつるほどに今は心置きなく、あれなる御国へと昇り参らせたまえ。いざ、璋子様、御昇天随行つかまつります！」と、かつて若かりしとき頼まれながらも果せなかつた引導をわたせる嬉しさに、勇躍西方浄土へと璋子をいざなつた。見れば確かに西方の上空の一点、まばゆいば

かりの光があらわれ、そこからはえも云われぬ芳香と、おだやかで絶妙なる楽の音が、七色の虹となつて響きわたつてくるのだった。なんとも云えぬ懐旧と故郷へ帰るがごとく思慕が璋子の胸をおそいくる。文字どおり引き寄せられるがごとく西行とともに身が浮き上がったと思われた刹那「あじなきや、子らを見捨てて行く人かな」という決めつけるような男の太い声が璋子の耳をついた。続いて足下の六つの業火より「おたあ様」「はは君様」という幼子から成人にいたる我子と思しきそれぞれの声がつつわつて来た。稚児のままに逝かせた二宮はじめ皇子皇女らが業火の主と知れるや「通仁！君仁！」と、たちまち半狂乱のさまで闇に、地にもどる璋子であった。是非もなし西行も降り来たつては璋子の耳元で「こはあやかしなり。無垢なる稚児のそも業に墮すべきや。禧子内親王様はすでに御昇天なされ、崇徳様はじめ宮様がたらはなお現しにおわすなり。み心をものけに煩わせ給うな」と力強く告げてその狂乱をしずめるのだった。彼の声に向かつては「斯く宮をたばかるとはなにごとぞ。汝、魔性のもの、疾く去れ！」と大音声で云い渡す。するといかなるあやかしのわざか、六つの業火が横に走つてそれぞれ

がつながらり、ついで西行と璋子のまわりをゆつくりと廻り始めた。その一か所から強く炎が立ったと見るや火の輪全体が異形のものへと変わって行く。すなわち炎の輪がとぐろとなり、立った炎がかまくびとなつて、挙句胴回り三尺はあるうかという大蛇へと変じた。その口から瘴氣を放ちつつ「あなかま。痴れ者が魔性と云うぞ。我こそはナーガ、古（いにしえ）ゆ神にして三界そのものなり。我を離れていづちへ行くべくもあらず。汝中宮璋子、かくいやしき者に沿うは笑止なり。汝がむつび馴れにし白河、鳥羽も、汝が皇子らも、なべてわがうちにこそ住まうなれ。生死の輪廻は我にあればなり」などとたくみに人語をあやつつてみせる。それへ「どの面（つら）さげて、またいかなる身体をもちて神とは云うぞ。生死輪廻などと、ともに笑止なり。六道輪廻ならん。六道の蛇よ、もののけの分際で人をたばかるとは許さるまじ」と云つて西行は一語だにかえりみない。「うぬが、義清が！法師づらさげてよくも云いたり。人の妻を、まいて中宮を、身の程も知らず寝取るとは義も仁も知らぬやつ。その折りの呆けたる様、いま目の前で見せてくれようか！」などと大蛇は云い、瘴氣を高めつつ口から火を吐いた。さら

にとぐろを内に閉めたかとみるや西行はともかく璋子が火にまどい、その身を苦しげによじらすのだった。去るどころか再び憑こうとする蛇に西行はまなじりを決し「作麼生（そもさん）、離れかぬは誰ぞ。、なべてなき、黒き炎の苦しみは、夜の思いの報いなるべし、、汝（な）が執着より離れよ！喝（かいつ）！」と、数珠をかけた右手を蛇に向けて、さすの気合いと歌わざもてこれを制し、空いた左手を璋子の身に充てて光を入れる。金縛りにあつたようだったその身が解放されたのを見届けたあと、もはやこれまでとばかり「蛇よ。離れかぬるものは、せちなるものは、畢竟他か、おのれか、いづれぞや。さを明かすべし。、汝（な）が身にぞ欲（ほ）りするままに食らいつけこの六道を廻らば廻れ、」と歌を詠み調伏の経を無心に唱えつづけた。御仏の思し召しが現れたものか怒り心頭に達した大蛇が西行に食いつこうとしたが実際にはおのが尻尾に食らいつき、そのまま猛烈ないきおいで飲み込み始めた。胴体は口から逃げ口は身を追いかけ、畢竟ただグルグルと廻るばかり。まさに六道輪廻だ。そのあさましさにあきれかえる璋子に「お方様、身のさかえ、愛欲を求むるの心はただにこの通りと御覽ずれば、ま

たそは六道の益なきわざと見取られたまえば、もはや現しにおはすも何にかはせむ。雲隠れの儀、さて御覚悟のほどは？」と西行は問い、また「皇子皇女様らの恋しくばお方様の御昇天こそ肝要なれ。ここにこそ皇子様らの魂はおはしまして、お方様を待ちはべるなれ。そのいたらむ国のみならず、輪廻転生またの世までも、この西行御随行つかまつるほどに、いざや、璋子様……と再度の引導を渡す。璋子とは見れば「義清、いや法師様。この蛇にわが身を見ればただあさましゅう覚えてなむ。み前に恥じ入るばかりなり。もしいたるべきものならば、許されるものならば、西方浄土へ参りたし。御僧にこの身、託さばや」と虚心に云う。その途端廻る大蛇のすがたは璋子の眼の中で塵の世を示す万華鏡のようなものに変わった。廻っている。人々の喜びや悲しみ、怒りやそねみ、愛憎の相などを呈しながら無限にどこまでも。そのめくるめく様に魅せられるなら、人は決してその轍から逃れられないことが、いまの璋子にははつきりと自覚された。肉体を去つてようやく知ったみずからの愚かさに璋子は静かに涙し続ける。すなわち心の中を法雨がぬらして行く。璋子の新生を願つて西行はしばらく光を入れ続けた。六道

の万華鏡が億土の彼方に去つて行く。俗世の身の落飾ではない心の、まことの落飾を見とどけたあと西行は「なんのこの西行拙なればとみにみ仏のもとに参らすまで」と応じ、さらに「璋子様、彼処を御覽ぜよ」と璋子の目を誘う。いかなる神わざか虚空に開いた先ほどの浄光の一点が光を増して行き、西方の空が明るんだと見るや、なんとそこにいま一組の西行と璋子の姿が現れた。こちらの二人を見詰めていると思いきや、彼らを追つて今度は俗世姿の義清と璋子が現れ、さては法衣の二人はそちらを見ていたのかとも思うし、やはりこちらを見ていとも思える。それはあたかも魂、心、現象それぞれの西行と璋子が顕現したがごとくだった。そのうちの二組、すなわち魂と現象の西行と璋子が追い駆けごつこを始めた。法衣の二人は逃げ、俗衣の二人が追うのだがその二組の距離は縮まりそうでなかなか縮まらない。まるで永遠の追っかけっこをしているようにも見える。「かの景こそ阿漕の浦の姿なれ」と西行が云う。「璋子様、哀れの景なれば、いかが、我ら上がりて繋がばやと覚えはべるを」「さはいかに」のやりとりのあと、二人の身は上空にあがり、たちまち俗衣の西行と璋子に追いついて、慈愛のなかに

それを融合させながら、更に上なる魂の二人を追い始めた。かの浄光の一点が神々しくまばゆく、みるみる近づき、ひろがって来る。前の二人はその中に逃げた。時空の失せた、今がすべての原初の世界が今や眼の前だ。「いかに璋子様」最後の西行の言葉に「えも云われぬ！おお、神よ、仏よ、み光よ！われを許したまえ。夫（つま）を、皇子らを許したまえ。堀河を：：やしないたまえ」と璋子はみそぎつつ「法師様、西行様、いずこへ：：」と今はかききえた西行の姿を、結んでいた手を追い求めた。返事かわりに皇子たちの声が聞こえる。生まれかわった自分の声がする。今生の失敗をみそがんとする未来世の乙女の姿が、見える！「こんどこそ、こんどこそ：：」と決意する璋子の耳に、いや魂に「われはともあり。君のまわりいっさいこれすべて我なり。永久に御随行つかまつるべし」なる言葉が、いや西行の魂の波動が伝わって来た。妻春子を、娘花子をなわがしるにしたおのれなど、今後いっさい転生かわずとする法師の、利他そのものに変じた魂の波動が：：。

さて物語はこれで終りではない。クワンティエンの夢を、その顛末を我々は未来世に見届けなければ

ならない。魂と、心と、現し身ははたして合一するものや否や：：しかし璋子の桜花はたしかにいま散った。はた今そは美しからずや。精いっばい生き、咲いて、散らせばなり：：。（以下次号）

### 「小説返歌」

願はくは花のしたにて春死なんその望月のきさらぎのころ

—西行法師

